



校内研究全体会 年度末のまとめ

- (1) 各分科会より成果と課題 ①高学年分科会 ②中学年分科会 ③低学年分科会
- (2) 研推としての成果と課題
- (3) 来年度の研究の方向性

(1) 各分科会より成果と課題

①高学年分科会

《成果》

事後アンケートより

○好き・どちらかという好き、と回答した児童が 22 人から 25 人に増えた。

(好き：11 人→17 人、どちらかという好き：11 人→8 人)。

○「どうしたら技ができるようになりますか。」という質問に対して、「友達に教えてもらう」と回答した児童の人数が 14 人から 22 人に増え、友達と学び合うことが、技能の向上につながると考える児童が増えた。

○チームタイムで課題を解決しようとするときに、エンジョイタイムの動きを行っている児童が数人いた。エンジョイタイムは、児童の意欲付けや感覚づくりだけではなく、児童の課題を解決するための一助になったと考えられる。

○普段教室の他教科で行っている「全員が～」という学習形態を体育の学習でも同様に行えたことで、児童は普段通り自分だけではなく、仲間の課題解決に向けて取り組めた。

○単元を通して、学習の振り返りの際に、「知識・技能、思考・判断・表現、主体的な態度」の 3 観点を教師が明確にして意図して価値づけたことで、チームタイムの際に生かせることが多くあった。

《課題》

●「どうしたら技ができるようになりますか」という質問に対して、「運動の振り返りをする」と答えた児童の数が 8 人で変わらなかった。友達との学び合いを通して、自己の課題と解決方法を考える手立てとして、さらに学習カードなどの振り返りを充実させるべきだった。

●ポイントタイムの映像資料は、一回流して終わりにするのではなく、何回も繰り返し流せれ

ばよかった。そうすることで、児童が自分のタイミングや必要なときに映像でポイントの確認ができる。

- チームタイムの練習の質を向上させるための、意識や課題の持たせ方を振り返りの時間にもたせるべきだった。

②中学年分科会

《成果》

- 跳び箱運動が好き・どちらかというときと好きと答えた児童が32人と7人増えた。また、どちらかというときすきではない・好きではないは9人から2人に減ったことから、同じめあてをもった友達と同じ場で教え合うことで、お互いの成長を見届けたり称賛したりすることができ、意欲の高まりにつながった。
- 運動が楽しかったのはどのような時という質問に対し、いいねカードを活用し友達にアドバイスができたときと答えた児童が2倍に増え、友達に教えてもらってできるようになったり、技のポイントが分かったりしたときも楽しいと感じた児童が増えたことから手立てとして有効であった。
- サーキットタイムの動きは、多くの児童が楽しく取り組むことができた。
- 技ができるようになったり、上手になったりした理由として、学習カードの振り返りで自分のめあてをもって練習したからと回答した児童や、たくさん練習するといった粘り強さが多くの児童から見られた。
- 学習カードの最後に次時のめあてを立てさせることで、場の人数分配や場の段数の調整をすることができてスムーズに学習に取り組むことができた。
- 集合をして、いい人の跳び方を見ることで自分との違いを意識して跳ぶことができた。また、苦手な児童でも少しでも成長したことを発表することによって自信につながることがあると分かった。

《課題》

- サーキットタイムでは、6つの場を考えたが、時間をかけすぎてしまったことや、活動内容が手の突き放し系の動きが多く負担が多かったように感じた。
- ポイントタイムの初めでの3回連続には課題をつかむ意識をもたせきれなかった。
- ポイントタイムでの練習は同じ能力、課題をもった人が集まるので、上手な人や得意な人のアドバイスや見本を見る時間が少なかった。
- 苦手な児童にとってはいいねカードが全ての場で共通だったため、更に具体的なポイントを示す必要があった。
- 一つの場の人数調整を学習中にしていく必要があった。人数制限を設けたほうが効率的。

③低学年分科会

《成果》

- 忍者修行という設定のもと、導入で動画を見せたり、ストラックアウト形式の掲示物を用いたりすることで、単元をとおして児童の跳び箱を使った運動遊びへの意欲を保つことができた。
- 単元計画を工夫し、難易度の低い技から取り組んだことで、当初のアンケートで跳び箱がこわい、苦手と答えていた児童も楽しそうに活動に取り組む姿が見られた。
- 1時間の授業の流れを固定し、単元をとおして取り組ませることで、児童も見通しをもって主体的に学習に取り組む姿が見られた。
- 毎時間の跳び箱の準備では、グループで同じ場を作らせたことで、児童自身が安全に気を付けながら効率よく準備することができた。
- 自分の動き(技)の命名をさせたことで、どの児童も工夫点を言語化することができた。また、技名を紹介することで、高さや体の動かし方、音などさまざまな視点をもたせられた。

《課題》

- 児童の興味をひく教具を作ることができたが、もっと児童に身に付けさせたい動きに応じた工夫をする必要があった。また、教具の置き場所によっても児童の動きの質が変わってくるので、授業の中でも臨機応変に位置の調整をするべきであった。
- 友達の動きを見るための「ミニ仙人の場」を設けたが、毎回同じ児童の動きを見ることとなり、褒める内容にあまり変化が見られなかった。そのため、自分の動きで見てほしいポイントをあらかじめ伝えてから取り組ませてもよかった。また、毎時間の見合うペアを変えたり、グループ全員で見合ったりする方が効果的である。
- 児童の動きの視点として、「空中姿勢」に関するものがほとんど見られなかった。そのため、活動中に教師が手裏剣を投げるふりや刀で切るふりをするなどして、それを避ける動作から空中姿勢への価値付けを行い、遊びの中で児童に新たな視点をもたせていくことができればよかった。
- 今回取り組ませた五種目走に関しては、授業の回数を重ねるたびに児童はコツを掴んできたが、今後もこの取り組みを続けていくためには、それぞれの単元に合わせた動きを精選していく必要性を感じた。

(2) 研推の成果と課題

《成果》

- ・全体協議の前に分科会協議を入れたこと。
 - 発言しやすい。意見や考えを交流しやすい。授業に対する疑問がすぐに解決できる。
 - より多くの人が協議に関わることができるようになった。
- ・体育倉庫等の環境整備

《課題》

- ・全体協議の場が協議ではなくて、分科会協議の報告で終わってしまっている。
 - 全体協議で授業をよりよくするための代案を協議できる場にできるよう改善が必要。

(3) 来年度の研究について

①校内研究 授業予定日（講師来校）☆来年度も菅原健次先生に引き受けて頂きました。

① 6月16日（水） ② 6月30日（水） ③ 9月15日（水） ④ 9月29日（水）

⑤ 10月27日（水）⑥ 11月24日（水）※音楽会特時期のため校庭 ⑦ 2月 9日（水）

各学年1本ずつ提案 + 特別支援学級 1提案 合計7本授業

※分科会で領域を揃える（領域は児童が楽しみやすいものや先生方がやりたいものなど）

※授業日の設定を1・3・5学年とつばき学級を先（①～④）・2・4・6学年を⑤～⑧にする。

⇒来年度の授業日は希望をとるのではなく、研推で授業学年を検討し提案する。

②研究主題 進んで運動に取り組む体育学習～主体的・対話的で深い学びの視点を通して～

⇒来年度も継続予定

③研究主題に迫る手立て 3つの柱 内容の共通理解

1：主体的な学び → 単元指導計画の工夫

◎学習の見通しをもたせる ◎1時間単位の学習の流れを同じにする

（今年度実践の成果より）

2：対話的な学び → 児童同士の関わりに関連すること

例：◎見合う場の設定や手立てに関連すること

「できる・できない」の技能重視の体育を脱却する

3：深い学び → 児童に考えさせる授業作り

思考力・判断力・表現力などを高めていくための手立て

④その他（今後の研推の取り組み）

・体育の学習の基本的な指導方法の共通理解事項を作成

1 服装の約束

2 集合・号令

3 準備・整理運動

4 学習形態

5 準備と片付け など（菅原先生からのご指導をもとに春江の共通理解図る）

・体育の指導内容の系統を作成

（例）

	主体的な学び	対話的な学び
1年生	1時間の見通しをもつ	友達の動きを見る 称賛の言葉をかける
2年生		
3年生	単元の見通しをもつ	動きを見てよいところを見付ける アドバイスをする
4年生		
5年生	学習計画を立てられる	課題解決の方法を考える 運動の場を作る
6年生		